研究

「中島子玉墓碑銘」現代語訳

木許　博
（会員　佐伯市木立）

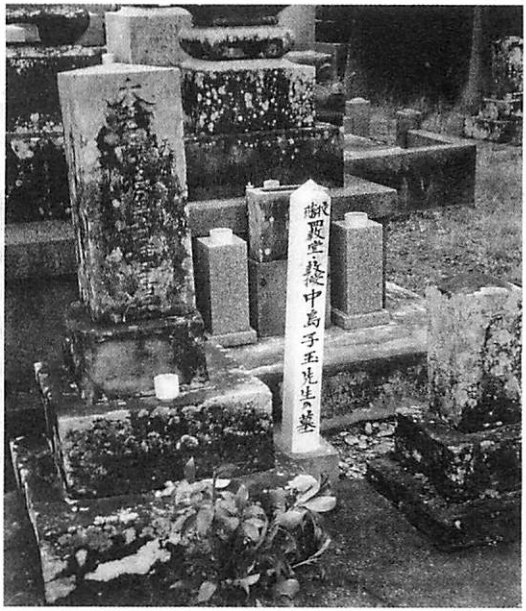
あぁ、これは中島子玉の墓である。子玉は、生前の名は大賚と言い、後に如玉と改め、米華を号とし増太と名乗った。豊後の人で家は代々佐伯侯に仕えた。父は幹右衛門と言う。子玉は若い頃から物わかりの良い、さとりの早い子で、学問を好み、以前私の咸宜園に数年間居たのだが、間もなくして、筑前・肥後・京都・大坂方面を旅して、それぞれ、亀井昭陽・古賀穀堂・頼山陽・猪飼敬所・篠崎小竹などの先輩学者を訪ねた。皆から稀に見る秀才だと認められた。また江戸昌平黌に入って、博士侗菴の教えを受け、学寮の室長に任ぜられた。また、学長林侯や冠玉松平侯からも名を知られ厚い待遇を受けた。佐伯侯はそのことを聞いて抜擢し、儒学の教授として藩の学問を担当させた。学生の向学の風は高くわき起こり、興隆発展しようとする矢先

碧松山久成寺　（城下西町）

に、君の急逝に会う。年はわずかに三十四才。つれあいは宇野氏で、一人の男子を産んだがその子も早死した。

子玉は、生来さっぱりした性格で、いつわり飾ることは避けた。人々は自然とその人柄を愛し敬った。その詩や文章は明るく新しく、変化があってするどく、書く文章は、考えが生まれる以前にもう書けているほどの早さであった。まことに普通人とはちがう不思議な才能を備えていた。遺稿は「愛琴堂集七巻」・「日本新楽府一巻」、雑書で編集していないものが数千篇である。死の間際に口ずさんだ詩は、「高い気分、情感は生まれつき一般普通の人とはちがった自分である。この私は南豊の一介の庶民である。（三十八鱗の鯉は龍となって瀧を昇るというが）私は三十六の鱗（歳）で二つを欠いておる。よし、今朝は天井高く龍となって飛び去るのだ。」

時は天保甲午（きのえうま一八三四）三月十五日であった。遠くの者、近くの人みなその死を嘆き悲しんだのであった。墓は佐伯の城東、碧松山久成寺にある。碑面の題字はその法名であるという。銘刻の文は、『なんときらびやかで美しく輝くことよ、桃の如くに、また李のように。中郎、子玉その詩は、あでやかになまめかしく、そして美しい。そ



大智院徳勇日健居士
天保五甲午年三月十又五日
〈穂長七〇㎝〉
瑞光嬰子
文政十三庚寅九月六日
中島増太長男莱太郎　年三才
〈穂長五〇㎝〉

の詩風、勢いは、青海原に捲き起こって紫の波濤を騒ぎめぐらす。中郎、子玉その文不思議でめずらしく、また奇怪。惜しむらくは、天は彼に才能を与えたけれども、寿命は授けなかった。人は等しく此の人を悼み悲しむ。なんと突然、にわかの痛恨時であろうか。遺文は百千とあるが祖先の廟に祀らない。なんとなれば、この人、子玉はまだ生きつづける』。

廣瀬　健　撰

※大智院徳勇日健居士（だいちいんとくゆうにちごんこじ）
「法華経提婆達多品第十二」中の「大智徳勇」の句から採った。

※佐伯史談第四号（S40・5・2）「碑文を予に請うこと、子玉が遺命なりとぞ」（懐旧楼筆記）（父幹右衛門に飛脚が届けた淡窓のことば）

※「佐伯に於ける金石文の最も貴重なもの」（佐伯史談第四号山田平之丞）として従来多くの先輩史家が採り上げているようですが、現代語訳になおしたものは見当たりませんので、ここに載せてもらいました。
（乞うご批正・碑文は漢文で三四五字）

「東瀛（とうえい）詩選」淡窓　五言律詩

佐伯國南彊　曾遊四教堂
奇書傾二酉　仙訣聚千方
吹浪江豚黒　連空海鰮蒼
先師墳墓在　夢裏或焚香

廣瀬淡窓肖像（日田咸宜園創設者）

佐伯は國の南疆　曽て四教堂に遊ぶ
奇書二酉を傾け　仙訣千方より聚まる
浪を吹く江豚黒く　空に連なって海鰮蒼し
先師の墳墓在り　夢裏或る人香を焚く

【口語訳】

佐伯（子玉の生地）は豊後国の南の境にあって、私は以前、藩校四教堂で勉強したことがあった。めずらしい書物が非常に多く書庫にうず高く積まれていた（八万巻・佐伯文庫）。多くの学者たちが諸方から集まって学問が大いにふるった。海では「いるか」が群れ泳いであたりはいちめん黒っぽく見えるし、海遠く空に続くほどに「いわし」が海面を埋めて青い波が遙かに広がる。丘には今は亡き恩師が墓に眠っており、遠い昔を偲びながら或る人（私・淡窓）が香を焚いてじっと手を合わせている。

・南疆＝さかい、界、境　・四教堂＝佐伯藩の藩校
・二酉を傾く＝中国湖南省の洞穴大酉、小酉が古書千巻を集めた故事。
・仙訣＝すぐれた学者　・江豚＝いるか（河豚＝ふぐ）
・先師＝今は亡き先生。松下筑陰、淡窓十四才の時、日田での恩師筑陰を佐伯に尋ねた（佐伯史談二一〇号）。
・或＝アルヒトとよむ。

※東瀛詩選（とうえいしせん）中国の学者が日本の代表的詩人の作品を選んで編集したもの。

中島子玉肖像より（切絵さとうたくみ）